

二〇二〇年度 入学 試験 問題

国 語

注意

- 一、解答用紙には受験番号の記入欄が三か所ある。
三か所とも正確、明瞭に記入すること。
- 二、解答用紙には氏名の記入欄が一か所ある。
正確、明瞭に記入すること。
- 三、解答はすべて解答用紙の所定欄に記入すること。
解答用紙の裏面は使用してはならない。
- 四、文字の不明瞭なもの、判読困難なものは、無効とする。
- 五、問題紙の本文は十四頁ある。試験開始後、落丁・損傷がないか確認すること。
- 六、試験終了後、問題紙は各自持ち帰ること。

— 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

現在知られているだけで一九〇万種にもものぼるさまざまな生物がいる。そしてそれらは共通点をもっている。高校の教科書を見ると生物の共通性というタイトルの下に共通点が列記されている。①体が細胞でできている、②生命活動のためにエネルギーを利用する、③DNAをもち自分とほぼ同じ形質をもつ子をつくる、④体内の状態を一定に保つ、⑤刺激に反応する、⑥進化する（『基礎生物 改訂版』、ちなみにこれは私が編集・執筆したもの）。③について少々補足しておこう。形質とは生物のもつさまざまな性質のこと。形だけではなく栄養要求性などのような性質も形質に含まれる。DNAは遺伝情報を担う分子であり、親のDNAがそっくりに複製されて子に伝わる。DNAは塩基が直線状に並んだ分子で、塩基の並び順序（塩基配列）がどの種類のタンパク質をつくるのかの情報を担っている。タンパク質は体の主要な構成要素で、アミノ酸が直線状に並んでできた分子である。アミノ酸の並び方（アミノ酸配列）がDNAの塩基配列により決まる。DNAの複製の仕組みやDNAからタンパク質のできる仕組み、そしてタンパク質を構成するアミノ酸の種類がどの動物でも共通なのである。

ここにあげられた共通点は生物の本質に関わる性質ばかりである（本質とは、それがそれだといえるために最低限そなえていべき性質）。そしてこれらは一セットとして、大腸菌にもクラゲにもヒトにも備わっている。これら六つの性質の一個一個を、クラゲが独立に獲得し、ヒトもそれとは独立に同じものを獲得し、そしてその獲得した性質の組み合わせたセットが、たまたま全生物で一致したなどということは、確率的にありそうにない。だから共通点は皆、大昔の共通祖先がもっていたものであり、それを一セットとして丸ごとずっと引き継いできたと考えるのが最もありそうなストーリーである。つまり今いる生物たちは、ずいぶん違って見えるけれど、皆、共通の祖先の子孫であって、血がつながっており、「われら生物、皆、親戚」と考えざるを得ない。

A そうだとすると三億年もの間、生物は途絶えることなくずっと続いてきたことになる。これは驚くべきことだろう。不動と
思える大地だってそんなに長いこと続いていないではないか！

三億年の間には絶滅してもおかしくない事件がたびたび起きた。全球凍結（地球全部が凍りついて巨大な雪玉になる事件）

が複数回あった。液体としての水がなくなれば生きていけないのが生物だから、これは死活に関わる大事件。巨大隕石もぶつかって来た。衝突で巻き上がった粉塵により日光はさえぎられ、光合成ができなくなった。つまり全生物にとっての食物供給源が絶たれたのだから、これも死活に関わる大事件。こんな存亡の危機にたびたび見舞われながらも、死に絶えることなく続いてきたのが生物の歴史なのである。このような事実を知らなければ知るほど、「生物はずっと続くようにできている」と考えたくなくなる。

とはいえ、生物の体はじつに精巧・複雑、そして繊細なものであり、ほんのちよつとしたことで死ぬ。こんなはかないものがずつと続いていくとは、ちよつと考えにくいことであり、生物には、続くように何か特別な仕掛けが備わっていると考えざるを得ない。それは何なのだろう？

ここで発想を逆転させ、われわれの手で生物のような構造物を作ることを想像してみよう。どんなふうになれば、こんなに精巧・複雑・繊細で、なおかつ続いていく構造物を作れるだろうか？

生物のモデルとして建物を考えたい。建物は複雑な構造をもち、かつ生物同様機能をもつものだからである。ずつと続いて行く建物はどうしたらたてられるだろうかと思考実験を試みることにしよう。続いていくためには、乗り越えねばならぬ二つの壁が存在する。①熱力学第二法則と②環境の変化である。

まず①について。秩序だった構造物は、時がたてば必ず無秩序になっていく、つまり壊れていくというのが熱力学第二法則。無秩序さが増えることを、エントロピーが増大すると表現する。物は必ず無秩序になる方向に変化するものであり、変化するとは時間が経つということだとすれば、これが物理的時間の存在する根拠の一つになっているのもうなずける。

絶対に壊れないように作ればずつと続く建物になるのだが、それはできないというのが熱力学第二法則。時が経てば必ず建物は壊れてしまう。

それならば、壊れてきたら直し、また壊れてきたら直しと、修繕し続ければ建物はずつと続いていくだろう。実際にこれを行っているのが法隆寺。世界最古の木造建築で一三〇〇年も続いており、世界遺産に認定されている。

ただしこのやり方には問題がある。直し続けるにつれ、古くていつ壊れるか分からない部分と新しい部分とが入り交じってくる。こんなものを手荒に使えば古い部分が壊れる恐れがあるから、使用には気を遣わねばならない。これでは創建時と同じ機能が保たれているとは言い難いわけで、機能の劣化していくのが「法隆寺方式」の難点なのである。

ここでは生物のモデルとして建物を考えているので、機能の劣化が起こっては困る。シマウマが老いてちよつとでも脚の機能が衰えてきたらライオンに捕まる。逆にライオンも、老いて脚力が衰えたら餌を捕らえられなくなり、やはり死を免れない。ずっと続いていくには機能がきちんと保たれる必要があるのが生物なのである。

御臨終ですと言われて生体から死体に変わる。この時、何が変わっているのだろうか。形も、体をつくっている材料にも変化はない。変わったのは生体のもっていた機能が失われた点である。達成すべき目的のために働くのが機能。そもそも死体には目的がない、だから機能はない。

古代ギリシャ人は魂（心、ギリシャ語でプシューケー）をもつものが生物だと考えていた。その考えをふまえ、アリストテレスは魂とは生物の機能だとする。魂というと、体からフワフワ離れて独自に存在できるものというイメージがあるだろうが、アリストテレスの言う魂は体の機能であり、体を離れてはありえない（彼は魂をたとえて、もし目を動物とするなら、視覚という目の機能が目の魂だと言う）。生体から機能＝魂が失われてしまえば死体なのである。

そこで機能が衰えずにずっと続く建物のたて方を考えたいのだが、その前に、同じものが続くという時の「同じ」ということを吟味しておく必要があるだろう。建物が同じだと言うときには、まず形の同じことが求められる。生物学においても形が圧倒的に似ているものを同じ種と認めている。形の違いだけで異なる生物だと分類しても、それほど見当違いにならないのは、形には多くの場合、機能が反映されているからだろう。形を重視するにはヒトの特殊事情もある。ヒトの感覚情報の主要なものが視覚だから、同じだと認めるには、見た目が同じでなければ話にならない。形の継続性が、同じものが続いていくことを考える際に最も重要なことになる。

形の次には材料を問題にするのが普通だろう。材料の場合は、ある程度、元のものが残っていれば、その建物はずっと続いて

いると認めるものだ。だからこそ修理の際に木材がかなり入れ替わっていても法隆寺は昔から続いていると世界的に認定されているのである。

普通には以上の様に考えるのだが、ここでは生物のモデルとして建物を取り上げているため、機能の継続性も問題にしたい。さて、機能がきつちりと続いていくような建物のたて方があるだろうか。

ある。それが伊勢神宮である。二〇年ごとに式年遷宮を行い、隣の敷地に元とそっくりのコピーを建てる。新しい材料を使って新たに建て直したものだから、機能も新品。神道では「常若とこわか」という考えを重視するが、式年遷宮により新品に更新し続けると、常に若々しく機能し続けられるというわけだ。

熱力学第二法則があるため同じものがずっと続いていくことはできず、「」をとらざるを得ない。そこで、形がそっくりであり、さらに作っている材料の継続性か、機能の継続性かのどちらかがある程度保たれていれば、それはずっと続いているとしてよいのではないか。「」として見るならば、法隆寺も伊勢神宮も、どちらも一三〇〇年、立派に続いていると私はみなしている。

^Bじつは生物が伊勢神宮方式を採用しているのである。子をつくるのが式年遷宮に相当する。子というコピーをつくることにより、体を更新しながら生物は続いていく。

こういうことを不用意に言くと、「数的に一つ」と「種において一つ」の区別を無視しているとの批判を受けるだろう。法隆寺は、たとえ材料が結構入れ替わっていても一つのものはずっと続いており、これは数として一つのものである。《数において一つであるもの》というの「個々の事物」のことにほかならない（アリストテレス『形而上学』）。数として一つとは個物（個体）として続くこと。それに対して伊勢神宮の方は平成二五年までに六二回の遷宮を行ってきたのだから、初代のを伊勢神宮一号、最初の式年遷宮で建て替わったものを伊勢神宮二号……とすれば、今のものは伊勢神宮六三号となって、六三回の伊勢神宮が今までに存在した。だから伊勢神宮は数的に一つではない。個々の「個体」としての伊勢神宮一号……六三号を共通にくくれるもの、つまり「種」において一つの伊勢神宮が続いてきたことになる（これはアリストテレスの「種」の使用法に従

つた言い方であり、種とは同じものや似たものの集合、つまりクラスやタイプの意味で、生物学における種を直接意味してはいない。

普通は数的に一つのもののみをずっと続けているとする。だがこれでは続かず、直し直しを続けていつても、いずれ昔から引き継いできた材料は残らず入れ替わってしまい、現在の法隆寺もやがては「法隆寺二号」と呼ばざるを得ないものになるだろう。同じものが繰り返すとは、種として同じだが数的に異なる出来事が生じることである。《消滅するものはどんなものでも、同一で数的に一つのまま存続することはできないから……（生物は）そのものが存続するのではなく種において一つのものも存続するのである》（アリストテレス『靈魂論』）。伊勢神宮方式とは「種において一つ」方式であり、これが熱力学第二法則に対処するために生物が採用した方法だった。

ただし生物は法隆寺方式（数的に一つ方式）も併用している。エントロピーは日々増大し、体は刻々と壊れていく。そして体は使えば使うほど壊れ方は激しい。そこで生物は壊れたところを日ごとに修理している。ヒトの場合、一日に四〇〇グラムのタンパク質を新たに作り直す。皮膚の細胞も日々更新され、ほぼ一ヶ月で皮膚内の細胞はすべて入れ替わってしまう。修理し続けているからこそ、死ぬまで体が機能し続けられるのである。

修理するには、修理に使う材料と、その作業をするためのエネルギーが要る。動物の場合、材料もエネルギーも餌を食べることにより手に入れているのだから、その能力を維持する必要がある。動物なら餌を捕まえるための感覚能力や運動能力、食べたものを消化吸収する能力を維持しなければならないし、植物ならば光合成能力や根からの水分や養分の吸収能力の維持が必要になってくる。手に入れた材料をもとに、自分の体の構成材料（タンパク質や多糖類など）を合成する能力も保たねばならない。もちろん、捕食者に食われないようしなければ生き続けることはできないから、動物ならば鋭い感覚とすばやい逃げ足という機能、植物なら丈夫な細胞壁やアルカロイドなどの毒で体を守る防御の機能も必要になる。

以上の機能はみな生き延びるための機能であり、これらをまとめて広い意味での「栄養」と呼べば、生物の一生は、おおまかに言って「栄養の時期（この間に成長もする）」と「生殖の時期（この間に子をつくる）」とに分けられると言ってもいいだろう。

栄養の時期には法隆寺方式で体を維持し、さらに建て増しを行いながら生き延び、成長して子をつくれるほどの体力をつける。こうやってずっと続いていけるなら問題はないのだが、時が経てば体には直してもなおしても直しきれない「ガタ」が溜まってくるものだ。そこで今の体には早々に見切りをつけて伊勢神宮方式に切り替え、体の総入れ替えをする。それをやるのが一生の後半の「生殖の時期」である。

生物個体のもつ複雑な機能は、個体の維持（栄養）であれ生殖であれ、ずっと続いていくことに関係している。オルガニコンとは、個々の器官が全体の目的実現のために協調して働いているものだった。それに合わせて言えば、エネルギー供給に関わる消化吸収器官や循環器官も、餌を捕まえ・敵から逃げることに関わっている感覚器官や運動器官も、子をつくる生殖器官も、ずっと続くという大きな目的の実現に役立つように協調して働いているのが生物（オルガニコン）なのである。

生物は伊勢神宮方式を採用していると言ったのだが、厳密には違うところがある。伊勢神宮ではまったく同じコピーを作る。ところが生物の場合、子は親と似てはいるがちよつと違う。コピーをつくる際に有性生殖を行うから、コピーが原本と少し違ってくるのである。

生物も昔は原本通りのコピーをつくっていた。生物の歴史をたどると、最初に原核生物という単細胞生物が登場した。細菌（バクテリア）や古細菌の仲間である（単細胞生物とは体が細胞一個からできている生物。体が複数の細胞でできているのが多細胞生物）。単細胞生物は今でも自分の体を二つに割って子をつくる。

つくる。 b その後に登場した多細胞生物では、個体に雌と雄という区別が登場し、雌雄の間で有性生殖を行う。その結果できてくる子は親と似てはいるが、ちよつと違ったものになる。

c 「同じもの」が続くのが生物の究極の目的なら、子は親そのままのコピーであるべきなのに、なぜそうしないのだろう。有性生殖は無性生殖にくらべ、たいそう複雑な過程であり、その分コストがかかる。それにそもそも生殖するのに相手が必要なのだから、相手がみつからないで生殖できずに終わるリスクまで背負い込むのが有性生殖。わざわざそんなことまでして、あえて同じコピーをつくらないのはなぜだろう？

これには続くことに立ちはだかる第二の壁、環境が変化するという壁が関係する。この壁は同じコピーをつくり続けていては

乗り越えられないものなのである。

生物とは、その置かれた環境の中で生きていく。生物の特徴として「環境に適応する」点が挙げられるが、適応とはその環境で生き続けること。環境には気温・降水量などのような物理的環境の他に生物的環境もある。「食う―食われる」の関係をはじめ、まわりの生物と密接なつながりをもって暮らしているのが生物であり、まわりの生物たちも環境である。そして物理的環境も生物的環境も、時がたてば変化する。気温や大気中の酸素濃度などは、長い地球の時間でみれば大きく変化してきたし、まわりの生物たちも変化した。たとえば新種の病原菌や寄生虫の登場も生物的環境の無視できない変化に含まれる。

環境が変われば、今の個体そのままのコピーが、新しい環境でも生き残れるかは保証の限りではない。ただし環境がどう変化するかは予測不能。そんな状況下でもこのさき生き残っていけるようにしたい。それにはどうしたらいいか。

コピーをつくる際に、今の個体とはちよつとだけ違うさまざまのコピーをつくつたらどうだろう。いろいろなものがあれば、どれかは新しい環境中でも生き残る可能性が出る。ただし違えると言つてもちよつとだけ。環境は、親子の世代交代程度の短期間に大きく変わる確率は低いから、まったく違う子をつくると、そんな子は生きていけないだろう。親のコピーと言えるほどよく似ていながらある程度の多様性をもつ子を複数つくる。その仕組みが有性生殖なのである。

(本川達雄「生きものとは何か」)

設問

(一) 空欄 a、c に入る語句として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

- 1 つまり
- 2 かならずしも
- 3 もし
- 4 なぜなら
- 5 たとえ
- 6 かつて
- 7 ところが

(二) 空欄「」には同じ語句が入る。適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 最善の策
- 2 改善策
- 3 奇策
- 4 次善の策
- 5 得策

(三) 傍線——A について、「生物は途絶えることなくずっと続いてきたことになる」の説明として適当なものを、次のうち

から一つ選び、その番号を記せ。

1 生物は、大昔の共通祖先が一セットとしてもつていた性質を、生物ごとに別個に組み合わせて引き継いだと考えられるから、巨大隕石の衝突のように食物供給源が絶たれる大事件にあっても、存亡の危機に耐えられるものは生き残ったと考えられる。

2 生物は、大昔の共通祖先が一セットとしてもつていた性質を、生物ごとに別個に組み合わせて引き継いだのに、存亡の危機に見舞われながらどの生物も死に絶えなかったのは、生物の体がじつに精巧で複雑、繊細な構造物であったからだと考えられる。

3 生物は、大昔の共通祖先が一セットとしてもつていた性質を、丸ごと引き継いだと考えられるので、絶滅してもおかしくない事件が三八億年の間たびたび起きながらも、生物に備わっている特別な仕掛けにより死に絶えることなく続いてきたと考えられる。

4 生物は、本質に関わる性質がたまたま一致したことにより、全球凍結のために液体としての水がなくなるといふ、全生物にとつての大事件にあつても、死に絶えることなく続くことができたと考えられる。

5 生物は、本質に関わる性質を一セット丸ごと最初からもつていたと考えられ、不動と思える大地よりも、生物が死に絶えることなく長く続いたことは、じつに驚くべきことであるが、絶滅を免れた理由はわからない。

(四) 傍線——Bについて、「生物が伊勢神宮方式を採用している」とはどういうことか。適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

1 伊勢神宮が式年遷宮で新たに建て直されるように、生物も数的には一つではないが、種において一つであり続けるということ。

2 伊勢神宮が、修理を続けることによって、古い部分が新しい部分に入れ替わっていくように、生物も数的に一つのものとして続いていくということ。

3 伊勢神宮が、式年遷宮を行うことで、建て替わった六二個の「個体」として存在したように、生物も有性生殖を行い続いていくということ。

4 伊勢神宮が、修理を続けることによって、昔から引き継いできた木材が完全に残らなくなるまで続くように、生物も「個体」として死ぬまで続いていくということ。

5 伊勢神宮が、式年遷宮を行うことで、種としては同じだが数的に異なる出来事が生じるように、生物は「個体」としてずっと続いていくということ。

(五) 傍線——Cについて、「栄養の時期」と「生殖の時期」の説明として適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

1 餌を捕まえるための感覚能力や運動能力、水分や養分を消化吸収する能力、体を守る能力を必要とする「栄養の時期」と、成長して子をつくれるほどの体力をつける「生殖の時期」とに分けられる。

2 餌を食べるために必要なエネルギーを手に入れ、捕食者に食われないようにする鋭い感覚や逃げ足、丈夫な細胞壁や毒などで体を守る「栄養の時期」と、なおしても直しきれない今の体で生き延びる「生殖の時期」とに分けられる。

3 エネルギー供給に関わる消化吸収器官や、敵から逃げることに関わる感覚器官・運動器官を維持する「栄養の時期」と、子をつくる生殖器官をつくる「生殖の時期」とに分けられる。

4 材料やエネルギーを手に入れ、食べたものを消化吸収するとともに、体を防御することで、個体を維持する「栄養の時期」と、今の体には早々に見切りをつけて体の総入れ替えをする「生殖の時期」とに分けられる。

5 光合成能力や、自分の体の構成材料を合成する能力よりも、捕食者に食われないようにする鋭い感覚や逃げ足、丈夫な細胞壁や毒などで体を守ることを優先する「栄養の時期」と、今の体に早々と見切りをつける「生殖の時期」とに分けられる。

(六) 本文の内容に合致するものを、次のうちから二つ選び、その番号を記せ。

1 どの動物も、遺伝情報を担う分子であるDNAを複製したり、DNAからタンパク質を構成したりする仕組みを共通して

もっている。

- 2 物は必ず無秩序になる方向に変化するものであり、生物の体も刻々と壊れていくということが、熱力学第二法則である。
 - 3 脚の機能の衰えということが、動物の生死を分けるといふ点では、ライオンよりシマウマの方が深刻である。
 - 4 生体ももっていた機能が失われても、生体から死体へ変化したとはいえない。
 - 5 見た目が圧倒的に似ている生物でも、人の感覚情報に頼って同じ種と認めるのは見当違いである。
 - 6 ヒトは、一日に四〇〇グラムものタンパク質を新たに作り直しているので、皮膚内の細胞は、日々すべて入れ替わる。
- (七) 傍線——について、筆者は、「生物」がどのようにして「二つの壁」を乗り越えることができると考えているか、具体的に説明せよ（句読点とも四十字以内）。

(以上・九十点)

二 次の文章は、中世に編まれた聖徳太子の伝記の一節で、太子が九歳の時の出来事を記した箇所である。これを読んで、後の設問に答えよ。

夏六月のころ、一つの奇特はべり。撰津国難波浦の洲崎に家をつくり、心をすまし、歌を詠ずる人あり。この人、わが朝にはじめて今様を詠じ出だしける人なり。その姓名をば土師連八島と申すなり。わざと海辺を住所として昼はひねむすにうたひ暮らし、夜は夜もすがらうたひ明かす。松ふく風に琴をしらべ調子とし、岸打つ波を鼓として、この歌の音曲をたすけ、洲崎の千鳥の友よぶ声までも心をすます曲あるみぎりなり。かくのごとくふく風たつ波によそへていづれも流水の弁舌とどこほりなくおもしろく今様に詠じはべり。その声たへにしてまことにおもしろくはべりけるあひだ、夜な夜なに天より変化の物のあまくだり、その色五色にしてさうのまなこは明星のごとく光をはなてる鬼神にてはべりけり。八島が家のいらかのうへにゐて、歌の曲を聞きはべるなり。鬼神は歌の曲を聞いて感にたへず、ともに声を出だしてうたひはべれば、おもしろきことたとへんかたもなかりけり。天の明け方にはかきけすやうにうせはべりけり。人を出だして行末を見せしむれば、光をはなつて難波浦より南三十余町虚空にとび、住吉浦の海の中へとびいりはべり。

この鬼神さまさまの禁忌の歌をうたひはべれば、八島あやしくおもひ、このこと国の大事天下の御たりなりとて、内裏に参じ、このよしを奏聞す。時のみかど敏達天皇もろもろの臣下を召して、「先代の御代にかやうのことはべりけるなり。確かに例文を引きかんがへ申さるべし」と御たづねありければ、おのおの先規の例文を引かるといへども分明ならず。その時天皇、まことにや聖徳太子こそ未前方来の徳をそなへて、一切のことにおいてあきらかにしろしめすことなれば、このこと太子にとひたてまつらんとおぼしめして、太子にたづねたてまつりたまひければ、太子まことに鏡にかけたまふごとく、くもりもなくかんがへ奏したまへり。

「これは空に住む熒惑星と申す星にてはべり。かの星、もし下界の人間にいくさ兵乱おこり、飢渴不熟等の災難出現せんとては、その星童子のかたちを現じて人間にあまくだり、世の中のをさなきわらはべの中にもまじはつて、いまだきたらざる先に善悪のことを歌につくりて披露しはべるものなり。天に口なし、人のさへつりをもつてこととすといへり。もつてのほかの禁忌の歌

どもをうたひけり。天下の乱れ日本の大難出できたるべくはべり。一定東方より千島のえびすわが朝にせめきたつて王位のものぞ
 みをなすべきにや、いかさま明年の春三月の中をよくよく御つつしみあるべし」と御奏聞ましましければ、君も臣も東夷兵難の
 おそれ、太子の御知恵のやんごとなくましますことをたつとみたてまつりたまふ。この君は内典外典ことごとく通達したまふの
 みならず、かくのごとく天の変化を知り、天文地理冥道までもよくきはめてあきらかに達したまひけるありがたさよ、と万人た
 つとみをなしたてまつりたまふなり。

〔聖徳太子伝〕

注 今様 流行歌謡の一種。

設問

(一) 傍線—— a・bの意味として適當なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a					b				
曲					いかさま				
5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
興趣	陰影	強弱	法悦	変化	わざとらしく	おごそかに	ぜひとも	まして	なぜ

(二) 傍線~~~~~ア「人を出だして行末を見せしむれば」の解釈として適當なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 八島が人をつかわして鬼神の行方をお探しになるならば
- 2 鬼神が人の姿であらわれて八島の行方を見届けたところ
- 3 天皇が人をつかわして鬼神の行方を尋ねさせたので

- 4 八島が人をつかわして鬼神の行方を確かめさせたところ
- 5 鬼神が人の姿であらわれて未来をお示しになるならば

(三) 傍線~~~~~イ「天に口なし、人のさへづりをもつてこととす」の説明として適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 熒惑星が、人の姿で歌い、直接言葉で表現することのない天に代わって今後の出来事を知らせた。
- 2 直接言葉で表現することのない天が、八島の歌を通して、今後の出来事を示した。
- 3 熒惑星が、八島の歌を聞き、直接言葉で表現することのない天の意思を受け取った。
- 4 直接言葉で表現することのない天が、人々に歌を教えることで、今後の出来事を伝えた。
- 5 人が、熒惑星の力によって、直接言葉で表現することのない天の意思を歌い始めるようになった。

(四) 傍線-----①「奏聞す」、②「引かるる」、③「しろしめす」、④「とひたてまつらん」の動作主として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。なお、同じ番号をくり返し用いてもよい。

- 1 鬼神
- 2 八島
- 3 太子
- 4 天皇
- 5 臣下

(五) 傍線———「なすべきにや」の「に」と文法的意味・用法が同じものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 その声たへに^{||}して
- 2 鬼神にては^{||}べりけり
- 3 ともに^{||}声を出だして
- 4 かきけすやうに^{||}うせはべりけり
- 5 先代の御代にかやうのことは^{||}べりけるなり

(六) 本文の内容に合致するものを、次のうちから二つ選び、その番号を記せ。

- 1 一日中歌を歌っている八島は、松風や波と対話することができた。

- 2 海辺に住んでいる八島は、すばらしい声で今様を歌った。
- 3 鬼神の両目は、五色に輝き光を放っていた。
- 4 鬼神は、八島の家の屋根の上に座って歌を聞いていた。
- 5 鬼神は、八島の歌の間違いを耐えがたく思い正しい歌を教えた。
- 6 太子は、鏡をかけて出来事の吉凶を占った。

(七) 傍線——について「太子の御知恵のやんごとなくましますこと」とはどのようなことを受けて言っているのか、具体的に答えよ(句読点とも三十字以内)。

(以上・六十点)